堀辰雄

曠野

附・原典＋オリジナル訳注附　ＰＤＦ縦書ルビ版

［やぶちゃん注：先般、私のブログ・カテゴリ「堀辰雄」にて、正字正仮名で電子化し、注釈を施した堀辰雄満三十六歳当時の書簡体小説「十月」を受け、そこで霊感が発せられて創作された「曠野」を正字正仮名で電子化したが、この前半はその一括版である。

底本は国立国会図書館の近代デジタルライブラリーの角川書店昭和二三（一九四八）年刊の「堀辰雄作品集六花を持てる女」所収のものを視認した。

最後に原典となった「今昔物語集」巻第三十の「中務大輔娘成近江郡司婢語第四」（中務（なかつかさ）の大輔（たいふ）の娘、近江の郡司（ぐんじ）の婢（ひ）と成れる語（こと）　第四）の原典と注、及び、私の現代訳（リンク先は分離した私のブログ版）をオリジナルに附した。【PDF縦書版二〇一五年五月十七日公開　藪野直史】ブログ分割版の正字不全が気になり、修正したが、この一括ファイルは、外付けバックアップ・ファイルの全損壊により、原稿を消失しているため、新たに修正したブログ版を繋ぎ合わせて原稿を復元し、全く新たに仕切り直した。【二〇二三年二月九日復元（修正・変更含む）公開】］

曠野（あらの）

忘れぬる君はなかなかつらからで
いままで生ける身をぞ恨むる
拾遺集

一

そのころ西の京の六條のほとりに中務大輔なにがしといふ人が住まつてゐた。昔氣質の人で、世の中からは忘れられてしまつたやうに、親讓りの、松の木のおほい、大きな屋形の、住み古した西の對に、老妻と一しよに、一人の娘を鍾愛しみながら、もの靜かな朝夕を過ごしてゐた。

漸くその一人娘がおとなびて來ると、ふた親は自分等の生先の少ないことを考へて、自分等のほかには賴りにするもののない娘の行末を案じ、種々いひ寄つて來るもののうちから、或兵衞佐を選んでそれに娘をめあはせた。ふた親の心にかなつたその若者は、何もかもよく出來た人柄だつた上、その娘の美しさに夢中になつてしまつてゐることは、はた目にもあきらかだつた。さうしてそれからの二三年がほどといふものは、誰にとつても、何もいふところのない月日だつた。

が、さうやつて世の中から殆ど隔絶してゐるうちに、その中務大輔のところでは暮らし向きの惡くなつてゆく一方であることは、毎日女のもとに通つて來る壻にも漸くはつきりと分かるやうになつた。そのなかでは、男だけは以前と變らずに手厚いもてなしを受けてはゐた。それはかへつて男には心苦しかつた。が、女との語らひは深まる一方だつたので、男はその女のもとをばもはや離れがたく思ふやうになつてゐた。

ところが、或年の冬、中務大輔は俄かに煩ひついて亡き人の數に入つた。それから引きつづいて女の母もそのあとを追つた。女は悲歎のなかに一人きりに取り殘されて、全く途方に暮れずにはゐられなかつた。勿論、男は相變らず夜毎に來て、さういふ女をいたはり盡してはくれた。だが、世の中を知らない二人だけでは、すべてのことがいよいよ思ふにまかせなくなつて來ることは爲方がなかつた。毎日宮仕に出てゆく男のためにもそれまでのやうに支度を調へることも出來惡かつた［やぶちゃん注：「できにくかつた」］。それがことに女には苦しかつたけれども、どうすることもその力には及ばなかつた。

再び春の立ち返つた或夕方、女は端近くにゐた夫を前にして、この日頃思ひつめてゐたことを口にする決心が漸つとそのときつゐたやうに、こんなことを言ひ出した。

「わたくし達もこの儘かうして暮らして居りましては、あなた樣のおためではないのが漸つとはつきりと分つて參りました。父母のをりました間は、それでもまだ何かとお支度などもお調へしてさし上げられてをりました。けれども、かう何かと不如意になつて來ましては、それも思ふにまかせなくなり、お出仕の折などにさぞ見苦しいお思ひもなされることがおありでございませう。ほんたうに私のことなどは構ひませぬから、どうぞあなた樣のお爲めになるやうになすつて下さいませ。」

男はぢつと默つて聞いてゐた。それから急に女を遮つた。「ではこの己にどうせよといはれるのか。」

「ときどきわたくしのことが可哀さうにお思ひになりましたなら――」女は切なげに返

事をした。「餘所へいらしつてゐても、その折にはどうぞいつでも入らつして下さいませ。どうしていまの儘では、見苦しい思ひをなさらずに宮仕などがお出來になれませう。」

男はしばらく目をつぶつて聞いてゐた。それから急に男は女のはうへ目を上げ、素氣ないほどきつぱりと言つた。

「この己にこの儘おまへを置きざりにして往かれると思ふのか。」

それきりで、男はわざと冷やかさうに顔をそむけ、破れた築土のうへに葎がやさしい若葉を生やしかけてゐるのを、そのときはじめて氣がつゐたやうに見やつてゐた。

やがて女の漸つとこらへてゐたやうな忍び泣きが急にはげしい嗚咽に變つていつた。……

男は、さうやつて女のはうから別れ話をもち出されてからも、一日も缺かさず女のもとに來ながら、以前とはすこしも變らないやうに女と暮らしてゐた。しかしだんだん女の家から召使ひの男女の數も乏しくなり、築土なども破れがちになつて來、家に傳はつた立派な調度などもいつか一つづつ失はれてゆき出してゐるのが、男の目にもいつまでも分らないはずはなかつた。男の樣子が昔から見るとよほど變つてきて、以前よりか一層寡默（むくち）になりだしたやうに見えたのは、それから程經てのことだつた。しかし男はその樣子がさう少し變つただけで、女をいよいよゐたはり盡すやうにしてゐた。それが逢ふ毎に女にはたまらなく思はれて、どうしたらいいのか、ただもうあぐね果てるばかりだつた。

とうとう［やぶちゃん注：ママ。］また、或夕方、女はこらへかねたやうに言つた。

「いつまでもかうしてわたくしと一緒にゐて下さるのは、わたくしは嬉しがらなくてはならないのですが、どうもそれ以上に心苦しくてなりませぬ。わたくしはかうしてあなたのお傍に居りましても、あなたのそのお窶れになつたお姿を見ることが出來ませぬ。のみならず、この頃あなた樣はわたくしに隱して、何かお考へになつていらつしやるのでせう。なぜそれをわたくしに言つては下さらぬのです。」

男は物を言はずに、女をしばらく見てゐた。

「己がおまへに隱して考へごとなどをしてゐるものか」と男は何か言ひにくさうに口をきゐた。「おまへが自分のことに構はずに、己のことばかり構はうとしてゐるのが己には窮屈でならないのだ。己だつて、もう少ししたら、どうにかなるだらう。さうすれば、おまへ一人位はどうにでもしてやれるのだ。それまで、いま少し、辛抱してゐてくれ。」

男はさう言ひながら、ひと時、いかにもゐたゐたしさうな目つきで女を見た。しかし女はいつかそこに袖を顏にして泣き伏してゐた。男はしげしげと女の波うつてゐる黑髪を見てゐた。それから自分も急に目をそらせて、ふいと袖を顏にもつていつた。

男がその女の家に姿を見せなくなつたのは、それから何日もたたないうちだつた。

二

男が默つてふいに立ち去つてから、それでも女はなほ男を心待ちにしながら、幾人かの召使ひを相手に、さびしい、便りない暮らしを續けてゐた。が、それきり男からは絶えて消息さへもなかつた。女にとつては、それは自分から望んだこととはいへ、たまらなく不安だつた。待つことの苦しみ、――何物も、それを紛らせてはくれなかつた。それでも女はまだしもそのなかに一種の滿足を見いだし得た。――だが、いつまで立つても、男のかへつて來るあてのないことが分かつて來ると、わづかに殘つてゐた召使ひも誰からともなく暇をとり出し、みな散り散りに立ち去つて往つた。

一年ばかりのあとには、女のもとにはもう幼い童が一人しか殘つてゐなかつた。その間に、寢殿は跡方もなくなり、庭の奥に植わつてゐた古い松の木もいつか伐り取られ、草ばかり生い茂つて、いつのまにか葎のからみついた門などはもう開らかなくなつてゐた。さうして築土のくづれがいよいよひどくなり、ときをり何かの花などを手にした裸か足の童がいまは其處から勝手に出はひりしてゐる樣子だつた。

なかば傾いた西の對の端に、わづかに雨露をしのぎながら、女はそれでもぢつと何物かを待ち續けてゐた。

最後まで殘つてゐた幼い童もとうとう何處かに去つてしまつた跡には、もう一方の崩れ殘りの東の對の一角に、この頃田舍から上つてきた年老ゐた尼が一人、ほかに往くところもないらしく、棲みついてゐた。それは昔この屋形で使はれてゐた召使ひの緣者だつた。さうしてその尼は此の女をかはいさうに思つて、ときどき餘所から貰つてくる菓子や食物などを持つて來てくれた。しかしこの頃はもう女にはその日のことにも事を缺くことが多くなり出してゐた。――それでもなほ女はそこを離れずに、何物かを待ち續けてゐるのを止めなかつた。

「あの方さへお爲合せになつてゐて下されば、わたくしは此の儘朽ちてもいい。」

さう思ふことの出來た女は、かならずしも、まだ不爲合せではなかつた。

男にとつては、その一二年の月日はまたたく間に過ぎた。

しかしその間、男は一日も前の妻のことを忘れたことはなかつた。が、何かと宮仕が忙しかつた上、あらたに通ひ出してゐた伊豫の守の女の家で、懇ろに世話をせられてゐると、心のまめやかな男だつただけ、彼等を裏切らないためにも、男はつとめて前の妻のところからは遠ざかり、胸のうちでは氣にかけながらも、音信さへ絶やしてゐた。

最初のうちは、それでも男は幾たびか、人目に立たないやうにわざと日の暮を選んで、前の女のゐる西の京の方へ往きかけた。が、朝夕通ひなれた小路に近づいて來ると、急に何物かに阻まれるやうな心もちで、男はその儘引つ返して來た。男はこんなことで、心にもなく女とも別れなければならなくなる運命を考へた。

しかし、その儘女にも逢はずに月日が立つにつれ、もう忘れていてもいいはずのその女のことを何かのはずみに思ひ出すと、その女の、袖を顔にした、さびしい、俯伏した姿が前にも增して鮮明に胸に浮んで來てならなかつた。さうしてとうとう［やぶちゃん注：ママ。以下も同じ。］しまひには、その女のさうしてゐるときの息づかひや、やさしい衣ずれの音までがまざまざと蘇るやうになり出した。

その春も末にちかい、或日の暮れがた、男はとうとう女戀しさにゐてもたつてもゐられなくなつたやうに、思ひ切つて西の京の方へ出かけて往つた。

其處いらは小路の兩側の、築土も崩れがちで、蓬のはびこつた、人の住まつてゐない破れ家の多いやうなところだつた。漸く以前通ひなれた女の家のあたりまで來て見ると、倒れかかつた門には葎の若葉がしげり、藪には山吹らしいものがしどろに咲きみだれてゐた。

「こんなに荒れてゐるやうでは、もう誰もここにはゐまい。」男は心のなかでさう考へた。

おそらくその女も他の男に見いだされて餘所に引きとられてしまつたのだらうと詮めると、その女戀しさを一層切に感じ出しながら、その儘では何か立ち去りがたいやうに、男はなほあたりを歩いてゐた。すると、築土のくづれが、一ところ、童でもふみあけたのか、人の通れるほどになつてゐた。男は何の氣なしに其處からはひつて見ると、もとは何本もあつた大きな松の木は大てい伐り倒されて、いまは草ばかりが生ひ茂つてゐた。古池のまはりには、一めんに山吹が咲きみだれてゐ、そのずつと向うの半ば傾いた西の對の上にちやうど夕月のかかつてゐるのが、男にははじめてそれと認められた。その對の屋の方は眞つ暗で、人氣はないらしかつた。それでも男はそちらに向つて女の名を呼んで見た。勿論、なんの返事もなかつた。さうなると男は女戀しさをいよいよ切に感じ出し、袖にかかる蜘の網を拂ひながら、山吹の茂みのなかを搔き分けていつた。男はもう一度空しく女の名を呼んだ。男はそのとき思ひがけず反對の側にある對の屋からかすかな灯の洩れてゐるのを見つけた。男は胸を刺されるやうな思ひをしながら、そちらの方へさらに草を搔き分けて往つて、最後に女の名を呼んだ。返事のないのは前と變りはなかつた。男は草の中から其處には一人の尼かなんぞゐるらしいけはひを確かめると、頭を垂れた儘、もと來た道をあとへ引つ返した。もう昔の女には逢はれないのだと詮め切ると、それまで男の胸を苦しいほど充たしてゐた女戀しさは、突然、いひ知れず昔なつかしいやうな、殆ど快いもの思ひに變りだした。……

なかば傾ゐた西の對の、破れかかつた妻戸のかげに、その夕べも、女は晝間から空にほのかにかかつてゐた纖い月をぼんやり眺めてゐるうちに、いつか暗にまぎれながら殆どあるかないかに臥せつてゐた。

そのうちに女は不意といぶかしさうに身を起した。何處やらで自分の名が呼ばれたやうな氣がした。女の心はすこしも驚かされなかつた。それはこれまでも幾たびか空耳にきいた男の聲だつた。さうしてそのときもそれは自分の心の迷ひだとおもつた。が、それから

しばらくその儘ぢつと身を起してゐると、こんどは空耳とは信ぜられないほどはつきりと同じ聲がした。女は急に手足が竦むやうに覺えた。さうして女は殆どわれを忘れて、いそいで自分の小さな體を色の褪めた蘇芳の衣のなかに隱したのが漸つとのことだつた。女には自分が見るかげもなく痩せさらばへて、あさましいやうな姿になつてゐるのがそのとき初めて氣がついたやうに見えた。たとひ氣がついてゐたにせよ、そのときまでは殆ど氣にもならなかつた、自分のさういふみじめな姿が、そんなになつてまだ自分の待つてゐた男に見られることが急に空怖ろしくなつたのだつた。さうして女は何も返事をしようとはせず、ただもう息をつめてゐることしか出來なくなつてゐる自分の運命を、われながらせつなく思ふばかりだつた。それからまだしばらく池のほとりで草の中を人の歩きまはつてゐる物音が聞えてゐた。最後に男の聲がしたときは、もう女のゐる對の屋からは遠のいて、向ひの尼のゐる對の屋の方へ近づき出してゐるらしかつた。それからもう何らの物音もしなくなつた。

すべては失はれてしまつたのだ。男は其處にゐた。其處にゐたことはたしかだ。それを女にたしかめでもするやうに、男の歩み去つた山吹の茂みの上には、まだ蜘の網が破れたままいくすぢか垂れさがつて夕月に光つて見えた。女はその儘荒らな板敷のうへにいつまでも泣き伏してゐた。……

三

それから半年ばかり立つた。

近江の國から、或郡司の息子が宿直のために京に上つて來て、そのをばにあたる尼のもとに泊ることになつたのは、ちやうど秋の末のことだつた。

それから何日かの後、郡司の息子が異樣に目を赫やかせながら言つた。「きのふの夕方、向うの壞れ殘りの寢殿に焚きものを搜しに往きますと、西の對にちやうど夕日が一ぱいさし込んでゐて、破れた簾ごしにまだ若さうな女のひとが一人、いかにも物思はしげに臥せつてゐるのがくつきりと見えましたので、私はおどろいてその儘歸つて來てしまひましたが、あれはどなたなのですか。」

尼は當惑さうに、しかしもう見つけられてしまつては爲方がないやうに、その女の不爲合せな境涯を話してきかせた。郡司の息子はさも同情に堪へないやうに、最後まで熱心に聞いてゐた。

「そのお方にぜひとも逢はせて下さい。」息子は再び目を異樣に赫やかせながら、田舍者らしい率直さで言つた。「そのお方のはうでもその氣になつて下されば、わたしが國へ歸るとき一緒にお伴れして、もうそのやうなお心細い目には逢はせませんから。」

尼は、それを聞くと、まあこんな自分の甥ごときものがと思ひながら、それでも彼の言ふやうに女も一そそんな氣もちにでもなつた方が行末のためにもなるのではないかと考へもした。

尼はいくぶん躊躇しながらも、何時かその甥の申出を女に傳へることを諾(うべな)はないわけにはいかなかつた。

或野分(のわき)立つた朝、尼はその女のもとに菓子などを持つて來ながら、いつものやうに色の褪めた衣をかついだ女を前にして、何か慰めるやうに、

「あなた樣もどうして此の儘でいつまでも居られませう」と言ひだした。「こんなことはわたくしとしては申し上げ悪いことですけれど、いまわたくしの所に近江からいささか由緣(ゆかり)のありますものの御子息が上京せられて來てをられますが、そのものがあなた樣のお身の上を知つて、ぜひとも國へお伴れしたいと熱心にお言ひになつて居りますけれど、いかがでございませうか、一そそのもののお言葉に從ひましては。此の儘かうして入らつしやいます［やぶちゃん注：ママ。］よりは、少しはましかと存じますが。」

女はそれには何にも返事をしないで、空しい目を上げて、ときをり風に亂れてゐる花薄の上にちぎれちぎれに漂つてゐる雲のたたずまひを何か氣にするやうに眺めやつてゐたが、急に「さうだ、わたくしはもうあの方には逢はれないのだ」とそんなあらぬ思ひを誘はれて、突然そこに俯伏してしまつた。

夜なかなどに、ときをり郡司の息子が弓などを手にして、女の住んでゐる對の屋のあたりを犬などに吠えられながら何時までもさまよふやうになつたのは、そんな事があつてからのことだつた。夜もすがら、木がらしが萩や薄などをさびしい音を立てさせてゐた。どうかすると、ひとしきり時雨の過ぎる音がそれに交じつて聞えたりした。さうでなければ、郡司の息子が、ときどき自分の怖ろしさを紛らせようとでもするのか、あちこちと草の中を歩きまはつてゐた。……

そんな夜毎に、女は妻戸をしめ切つて、ともし火もつけず、身の置きどころもないかのやうに、色の褪めた衣をかついだまま、奥のはうにぢつとうずくまつてゐた。かくも荒れはてた棲み家では、奥ぶかくなどにぢつとしてゐると、その儘何かの物のけにでも引つ張り込まれていつてしまひさうな氣がされて、女は怯え切り、殆ど寢られずに過ごすことが多いのだつた。

或しぐれた夕方、尼は女のところに來ると、いつものやうに沁々(しみじみ)と話し込んでゐた。

「ほんたうにいつまで昔のままのお氣もちでいらつしやるのでございませう。」尼はことさらに歎息するやうに言つた。「それは今のやうにでもして居られますうちはまだしも、此のわたくしでも若しもの事がございましたら、どうなさるお積りなのですか。しかし、やがてさういふときの來ることは分かつてゐます。」

女は數日まへのことを思ひ出した。――數日まへ、尼にその話をはじめて切り出されたとき、突然はつとして「自分はもうあのお方には逢はれないのだ」と氣づゐたときのいまにも胸の裂けさうな思ひのしたことを思ひ出した。あのときから女の心もちは急に弱くなつた。それまでのすべての氣强さは――畢竟、それはいつかは男に逢へると思つての上での氣强さであつた。――女はもう以前の女ではなかつた。

その晩、尼は郡司の息子をその女のもとへ忍ばせてやつた。

それから夜毎に郡司の息子は女のもとへ通ひ出した。

女はもう詮方盡きたもののやうに、そんなものにまですべてをまかせるほかなくなつた自分の身が、何だかいとほしくていとほしくてならないやうな、いかにも悔やしい思ひをしながら、その男に逢ひつづけてゐた。

漸く任が果てて、その冬のはじめに近江へ歸らなければならなくなつたときには、郡司の息子はもうすつかり此の女に睦んで、どうしてもその儘女を置きざりにして往く氣にはなれずにしまつた。

女はそれを強ひられる儘に、京を離れるのはいかにもつらかつたけれど、しかし自分の餘りにもつたなかつた來しかたに抗ふやうな、さうして何か自分の運を試めしてみるやうな心もちにもなりながら、その郡司の息子について近江に下つていつた。

四

しかしその郡司の息子には、國元には、二三年前にめとつた妻が殘してあつた。さうして親達の手まへもあり、息子は、その京の女をおもてむき婢として伴れ戻らなければならなかつた。

「そのうちまた、わたくしは京に上るはずです。」息子は女を宥めるやうにして言つた。「その折にはきつと妻として伴れて往きますから、それまで辛抱してゐて下さい。」

女はそんな事情を知ると、胸が裂けるかと思ふほど、泣いて、泣いて、泣き通した。——すべての運命がそこにうち挫かれた。

が、一月たち二月たちしてゐるうちに、——殆ど誰にも氣どられずに婢として仕へてゐるうちに、——かうしてゐる現在の自分がその儘でまるきり自分にも見ず知らずのものでもあるかのやうな、空虛な氣もちのする日々が過ごされた。いままでの不爲合せな來しかたが自分にさへ忘れ去られてしまつてゐるやうな、——さうして、そこには、自分が横切つてきた境涯だけが、野分のあとの、うら枯れた、見どころのない、曠野のやうにしらじらと殘つてゐるばかりであつた。「いつそもうかうして婢として誰にも知られずに一生を終へたい」——女はいつかさうも考へるやうになつた。

此處に、女は、まつたく不爲合せなものとなつた。

山一つ隔てただけで、こちらは、梢にひびく木がらしの音も京よりは思ひのほかにはげしかつた。夜もすがら、みづうみの上を啼き渡つてゆく雁もまた、女にとつては、夜々をいよいよ寢覺めがちなものとならせた。

それから數年後の、或年の秋、その近江の國にあたらしい國守が赴任して來て、國中が何かとさわぎ立つてゐた。

國内の巡視に出た近江の守の一行が、方方まはつて歩いて、その郡司の館のある湖(みづうみ)にちかい村にかかつたときは、ちやうど冬の初で、比良(ひら)の山にはもう雪のすこし見え出した頃だつた。

その日の夕ぐれ、丘の上にあるその館では、守(かみ)は郡司たちを相手にして酒を酌みかはしてゐた。

館のうへには時をり千鳥のよびかふ聲が鋭く短くきこえた。――すつかり葉の落ち盡した柿の木の向うには、枯蘆のかなたに、まだほの明るいみづうみの上がひつそりと眺められた。

守(かみ)は、すこし微醺を帶びたまま、郡司が雪深い越(こし)に下つてゐる息子の自慢話などをしてゐるのをききながら、折敷(をしき)や菓子などを運んでくる男女の下衆(げす)たちのなかに、一人の小がらな女に目をとめて、それへぢつと熱心な眼ざしをそそいでゐた。他の婢と同樣に、髪は卷きあげ、衣も粗末なのをまとつてはゐたが、その女は何處やら由緒ありさうに、いかにも哀れげに見えた。その女をはじめて見たときから、守の心はふしぎに動いた。

宴の果てる頃、守は一人の小舍人童(こどねりわらは)を近くに呼ぶと、何かこつそりと耳打ちをした。

その夜遲く、京の女は郡司のもとに招ぜられた。郡司は女に一枚の小袿(こうちぎ)を與へて、髪なども梳いて、よく化粧してくるやうにと言ひつけた。女は何んのことか分からなかつたが、命ぜられたとほりの事をして、再び郡司の前に出ていつた。

郡司はその女の小袿姿を見ると、傍らの妻をかへりみながら、機嫌好さそうに言つた。

「さすがは京の女ぢや。化粧させると、見まちがふほど美しうなつた。」

それから女は郡司に客舍の方へ伴れて往かれた。女は漸つと事情が分つて來ても、押し默つて、郡司のあとについてゆきながら、何か或强い力に引きずられて往きでもしてゐるやうな空虛な自分をしか見出せなかつた。

守の前に出されると、ほのぐらい火影(ほかげ)に背を向けた儘、女は顏に袖を押しつけるやうにしてうづくまつた。

「おまへは京だそうだな。」守はそこに小さくなつてゐる女のうしろ姿を氣の毒さうに見やりながら、いたはるやうに問うた。

「……」女はしかし何とも答へなかつた。

さうして女は數年まへのことを思ひ出した。――數年まへには、田舍上りの見ず知らずの男に身をまかせて京を離れなければならなかつた自分が自分でもかはいさうでかはいさうでならなかつた。さうしてそのときは相手の男なんぞはいくらでもさげすめられた。が、こんどと云ふこんどは、その相手がかへつて立派さうなお方であるだけに、さういふ相手のいひなりにならうとしてゐる自分が何だか自分でもさげすまずにはゐられないやうな――さうしていくら相手のお方にさげすまれても爲方のないやうな――無性にさびしい氣もちがするばかりだつた。女にしてみると、かうして見出されるよりは、いままでのやうに誰にも氣づかれずに婢としてはかなく埋もれてゐた方がどんなに益(ま)しか知れなかつた。…

…

「己はおまへを何處かで見たやうなふしぎな氣がしてならない。」男はもの靜かに言つた。

女は相變らず袖を顏にしたぎり、何んといはれやうとも、懶(ものう)げに顏を振つてゐるばかりだつた。

館のそとには、時をりみづうみの波の音が忍びやかにきこえてゐた。

そのあくる夜も、女は守(かみ)のまへに呼ばれると、いよいよ身の置きどころもないやうに、いかにもかぼそげに、袖を顏にしながら其處にうづくまつてゐた。女は相變らず一こともの物を言はなかつた。

夜もすがら、木がらしめゐた風が裏山をめぐつてゐた。その風がやむと、みづうみの波の音がゆうべよりかずつとはつきりと聞えてきた。をりをり遠くで千鳥らしい聲がそれに交じることもある。守はいたはるやうに女をかきよせながら、そんなさびしい風の音などをきいてゐるうちに、なぜか、ふと自分がまだ若くて兵衞佐だつた頃に夜毎に通つてゐた或女のおもかげを鮮かに胸のうちに浮べた。男は急に胸騷ぎがした。

「いや、己の心の迷いだ。」男はその胸の靜まるのを待つてゐた。

突然、男の顏から涙がとめどなくながれて女の髮に傳はつた。女はそれに氣がつくと、いかにも不審に堪へないやうに、小さな顏をはじめて男のはうへ上げた。

男は女とおもはず目を合わせると、急に氣でも狂つたやうに、女を抱きすくめた。「矢張りおまへだつたのか。」

女はそれを聞いたとき、何やらかすかに叫んで、男の腕からのがれようとした。力のかぎりのがれようとした。「己だと云ふことが分かつたか。」男は女をしつかりと抱きしめた儘、聲を顫はせて言つた。

女は衣(きぬ)ずれの音を立てながら、なほも必死にのがれようとした。が、急に何か叫んだきり、男に體を預けてしまつた。

男は慌てて女を抱き起した。しかし、女の手に觸れると、男は一層慌てずにはゐられなかつた。

「しつかりしてゐてくれ。」男は女の背を撫でながら、漸つといま自分に返されたこの女、――この女ほど自分に近しい、これほど貴重(だいじ)なものはゐないのだといふことがはつきりと身にしみて分かつた。――さうしてこの不爲合せな女、前の夫を行きずりの男だと思ひ込んで行きずりの男に身をまかせると同じやうな詮(あき)らめで身をまかせてゐたこの慘めな女、この女こそこの世で自分のめぐりあふことの出來た唯一の爲合せであることをはじめて悟つたのだつた。

しかし女は苦しそうに男に抱かれたまま、一度だけ目を大きく見ひらいて男の顏をいぶかしそうに見つめたぎり、だんだん死顏に變りだしてゐた。……

■原典

［やぶちゃん注：以下は堀辰雄が本「曠野」の原拠とした「今昔物語集」巻第三十「中務大輔娘成近江郡司婢語第四」（中務の大輔の娘、近江の郡司の婢と成れる語第四）」である。底本は池上洵一編「今昔物語集　本朝部　下」（岩波文庫二〇〇一年刊）を用いたが、恣意的に漢字を正字化し、読みは必要と思われる箇所に歴史的仮名遣でオリジナルに附し（一部、底本に従わない読みを附した）、一部は私が追加した（底本は現代仮名遣）。また、記号の一部を変更した。**【二〇二三年二月九日追記】前回はブログ版と全く同じく、かなりのルビを附したが、今回の復元では、ルビ化作業に時間がかかるので、必要最小限と私が判断したものに限定して振った。そのため、ルビがいらぬように、本文自体も一部で読み易く変えてある（読みに含まれていた助詞や送り仮名を本文に出し、漢文脈表記を訓読することを指す。これは通常の「今昔物語集」の学術的訓読出版物で普通に行われているものであり、却って読み易くなっているはずである）。従って、ブログ版とは異なるものとなっていることは御承知戴きたい。**万一、読みが判らない、或いは、不安な場合は、ブログ版を確認されたい。□は欠字である。］

中務の大輔の娘、近江の郡司の婢と成れる語　第四

今は昔、中務の大輔□の□と云ふ人有りけり。男子は無くて、娘、只、獨りのみぞ有ける。

家、貧しかりけれども、兵衞の佐□の□□と云ける人を其の娘に會はせて、聟として年來を經けるに、此彼、構へて有らせけるに、聟も去り難く思ひて有ける程に、中務の大輔、失せにければ、母堂一人して、萬づを心細く思ひけるに、其れも、指し次き、煩ひて、日來に成りにければ、娘、糸哀れに悲しく歎きける程に、母堂も失せにければ、娘獨り殘り居て、泣き悲しびけれども、甲斐無し。

漸く、家の内に、人も無く、出で畢てにければ、娘、夫の兵衞の佐に、

「祖、御せし限りは、此彼、構へて有らせ聞えしを、此く便り無く成りにたれば、其の御 繚ひなども、叶はず。宮仕へは何でか見苦くても御せむ。只、何かにも吉からむ樣に成り給へ。」

と云ければ、男、糸惜しくて、

「何かで見棄てむずるぞ。」

となど云て、尙、棲みけれども、着物なども見苦く、只成りに成り持て行けば、妻、

「外也とも、糸惜しと思ひ給はむ時は、音信れ給へ。何かでか、此ては宮仕へはし給はむ。見苦き事也。」

と、強ちに勸めければ、男、遂に去りにけり。
去れば、女獨りにて、彌よ哀れに心細き事、限り無し。家も澄みて、人も無かりければ、只、幼き童一人なむ有りけるも、衣着る事も無く、物食ふ事も難くて、破無かりければ、其れも出て去にけり。
男も、然こそ、
「糸惜し。」
と云けれども、人の聟に成りにければ、音信れをだに爲ざりければ、出でて其れも云はむや、來る事は絶えにけり。然れば、様惡しく壞れたる寢殿の片角に、幽かにてぞ獨り居たりける。
其の寢殿の片端に、年老たる尼の宿りて住みけるが、此の人を哀れがりて、時〻菓子・食物など見けるをば、持て來つゝ、志しければ、其れに懸りて、年月を經ける程に、此の尼の許に、近江國より長宿直と云ふ事に當りて、郡司の子なる若き男の上りたりけるが、宿りて、其の尼に、
「徒然なる女の童部、求めて得させよ。」
と云ければ、尼、
「我れは年老て行きも爲ねば、女の童部の有らむ方も知らず。然て、此の殿にこそ、糸嚴し氣に御する姫君は、只獨り、有り難氣にて、御すれ。」
と云ければ、男、耳を留めて、
「其れ、己に會はせ給へ。然て、心細くて過ぐし給はむよりは、實に嚴しくは、國に將て下りて、妻にせむ。」
と云ければ、尼、
「今、此の由を云はむ。」
と受けり。
男、此く云ひ始めて後は、切に切て責め云ければ、尼、彼の人の許に菓子など持て行きたる次いでに、
「常には何かでか此ては御しまさむと爲る。」
など云ひて後に、
「此に、近江より、然るべき人の子の上りたるが、『然て御しますよりも、國に將て下り奉らむ。』と、切々に申し候ふを、然様にもせさせ御せませかし。此く徒然に御しますよりは。」
と云ければ、女、
「何かでか然る事はせむ。」
など云ければ、尼、返りぬ。
此の男、此の事を切ちに思ひて、弓など持ちて、其の夜、其の邊を行きければ、狗、吠えて、女、物怖しく常よりも思えて、侘しく思ひて居たりける程に、夜明けて、尼、亦、行きたるに、其の人云く、

「今夜こそ物怖しく破無かりつれ。」
と。
　尼、
「然ればこそ申し候へ、『然申す者に打ち具して御ませ。』とは。侘しき事のみこそ御しまさむずれ。」
と云ひ成しければ、女、
『實に何がせまし。』
と思ひたる氣色を、尼、見て、其の夜、忍びて、此の男を入れてけり。
　其の後、男、馴れ睦びて、見習はぬ心に去り難く思ひて、近江へ將て下りければ、女も、
『今は。何がはせむ。』
と思ひて、具して下りにけり。
　其れに、此の男、本より、國に妻を持ちたりければ、祖の家に住みけるに、其の本の妻、極じく妬み喧りければ、男、此の京の人の許には、寄りも付かず成りにけり。
　然れば、京の人、祖の郡司に仕はれて有りける程に、其の國に、
「新しく、守、成りて下り給ふ。」
とて、國、擧りて、騒ぎ合ひたる事、限り無し。
　而る間、
「既に守の殿、御しましたり。」
とて、此の郡司の家にも騒ぎ合ひて、菓子・食物など器量しく調へ立てて、館へ運びけるに、此の京の人をば、「京の」と付（つけ）て、郡司、年來、仕ひけるに、館へ、物共、運びけるに、男女の多く入りければ、此の京の、に物を、持たせて、館へ遣りけり。
　而る間、守、館にて、多くの下衆共の、物を持ち運ぶを見ける中に、異下衆にも似ず、哀れに故有りて、京のが、見えければ、守、小舎人童を召して、忍びて、
「彼の女は何なる者ぞ。尋ねて、夕さり、參らせよ。」
と云ければ、小舎人童、尋ぬるに、然〻の郡司の徒者也。聞きて、郡司に、
「此なむ、守の殿、御覽じて、仰せらるる。」
と云ければ、郡司、驚きて、家に返りて、京のに、湯浴し、髪、洗はせ、と、返〻す、傅立て、郡司、妻に、
「此れ、見よ、京のが爲立たる樣の美しさを。」
とぞ云ひける。然て、其の夜、衣など着せて奉てけり。
　早う、此の守は、此の京のが本の夫の兵衛の佐にて有りし人の成たりける也けり。然れば、此の京のを、近く召し寄せて見けるに、怪しく見し樣に思えければ、抱きて臥したりけるに、極めて睦ましかりければ、
「己は、何なる者ぞ。怪しく見し樣に思ゆるぞとよ。」
と云ければ、女、然も、え心得ざりければ、
「己は此の國の人にも非ず。京なむ有りし。」

なむ許り云ひければ、守、
『京の者の來りて、郡司に仕はれけるにこそと有るらめ。』
など、打ち思ひて有りけるに、女の娥しく思えければ、夜〻召しけるに、尙、怪しく物哀れに、見し樣に思えければ、守、女に、
「然ても、京には何也し者ぞ。然るべきにや、哀れに糸惜しと思へば、云ふぞ隱さで、云へ。」
と云ひければ、女、え隱くさで、
「實に然〻有りし者也。若し、舊き男にて有りし人の故などにてもや御しますらむと思ゆれば、日來は申さざりつるに、此く强ちに問はせ給へば、申す也。」
と、有りのまゝに語りて泣きければ、守、
「然ればこそ、怪しく思ひつる者を。『我が舊き妻にこそ有けれ。』と思ふに、奇異しくて涙の泛るるを、然る氣無しに持て成して有る程に、江の浪の音、聞えければ、女、此れを聞きて、
「此は、何にの音ぞとよ、怖ろしや。」
と云ひければ、守、此なむ云ひける。

これぞこのつひにあふみをいとひつゝ
世にはふれどもいけるかひなみ

とて、
「我れは、實、然には非ずや。」
と云ひて泣きければ、女、
『然は、此は、我が本の夫也けり。』
と思ひけるに、心に、えや堪へざりけむ、物も云はずして、只（、氷えに氷え、痊みければ、守、
「此は、何に。」
と云ひて、騷ぎける程に、女、失せにけり。
此れを思ふに、糸哀れなる事也。女、
『然にこそ。』
と思ひけるに、身の宿世、思ひ遣られて、恥かしさにえ堪へで、死にけるにこそは。男の心の無かりける也。其の事を顯さずして、只、養育すべかりける事を、とぞ思ゆる。
此の事、女、死にて後の有樣は、知らず、となむ語り傳へたるとや。

■やぶちゃん注

以下に示す「伊勢物語」第六十二段は圧縮されているが、シチュエーションと隠されたロケーション（近江）の酷似から本話の源泉を共にする異伝と考えられよう。

＊

昔、年ごろおとづれざりける女、心かしこくやあらざりけむ、はかなき人の言（こと）につきて、人の國なりける人に使はれて、もと見し人の前に出で來てもの食はせなどしけり。夜さり、

「このありつる人たまへ。」

と、あるじに言ひければ、おこせたりけり。

男、

「われをば知らずや。」

とて、

いにしへのにほひはいづら櫻花
　　こけるからともなりにけるかな

といふを、

『いと恥づかし。』

と思ひて、いらへもせでゐたるを、

「など、いらへもせぬ。」

と言へば、

「涙のこぼるるに、目も見えず、物も言はれず。」

といふ。

これやこのわれにあふみをのがれつつ
　　年月（としつき）ふれどまさりがほなき

といひて、衣（きぬ）ぬぎて、取らせけれど、捨てて、逃げにけり。

いづちいぬらむとも知らず。

＊

この「伊勢」の和歌を注しておくと、「いづら」は不定代名詞で「どこ」であるが、ここは感動しての「おや、まあ、どうした。」の意をも含ませるものである。「こけるから」は「扱ける幹（から）」で「花を扱き落してしまった桜の枝」、女の容色のすっかり衰えたことを指す。「あふみ」は、夫たる私と「逢ふ身」に「近江」を掛けるから、ここの「近江」は、この元の夫と住まいしていた所であったのであろう。「まさりがほ」は「優り顔」で、他の誰より幸せである、暮らし振りがよい、といった顔つき。本話とは異なり、男のねちねちとした恨み節が不快である。寧ろ、まだ「伊勢」で、この二つ前にある類型話をカップ

リングさせると、本話の濫觴の風景が見えてくるようにも思われる。以下にその第六十段も示しておく。

＊

昔、男ありけり。宮仕へいそがしく心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の國へ、いにけり。この男、宇佐の使ひにて行きけるに、ある國の祇承の官人の妻にてなむあるとききて、

「女あるじに、かはらけとらせよ。さらずは、飲まじ。」

と、いひければ、かはらとりて、いだしたりけるに、肴なりける橘をとりて、

五月待つ花橘の香をかげば
昔の人の袖の香ぞする

と、いひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞ、ありける。

＊

これも少し注しておくと、前に「宮仕へいそがしく」とあることから分かるように、「心もまめならざりける」というのは「家刀自」（妻）に対して、夫が、多忙を口実に、誠実ではなかったことを指している。「宇佐の使ひ」は豊前国（大分県宇佐市）にある宇佐八幡宮へ天皇の即位や国家の大事・天変地異などの際に奉幣をする勅使で、「祇承の官人」（「祇承」は「慎み仕える」の意）とは、こうした勅使らに供奉して接待役を勤めるところの地方役人を指す。「かはらけとらせよ」の「瓦笥」は素焼きの杯であるが、「かはらけとる」で「酒を勧める」の意。「橘」は柑子蜜柑で、上古より酒の肴とされた。「いだし」はゲストたる勅使は簾中に居ることを示す。まだしも、本話の方がマシであるのが、お分かり戴けよう。

以下、原拠の注。

・「中務大輔」中務省の次官（同省長官である「卿」に次ぐ）で正五位上相当。天皇補佐及び詔勅宣下・叙位など朝廷に関する職務の全般を担っていた中務省は八省中最も重要な省とされた。

・「兵衛の佐□の□□」「兵衛の佐」兵衛府の次官（同府長官である「督」に次ぐ）で従五位上相当。御所警衛・行幸の供奉・京師の巡視などを司った。兵衛府は左兵衛府と右兵衛府の二府があり、左右の近衛府（大内裏の中でも宣陽門・承明門・陰明門・玄輝門の内側の警備を担当し、行幸などの際の護衛や皇族・高官の警護も担当した近衛兵団）と衛門府（大内裏の外郭の中で建春門・建礼門・宜秋門・朔平門より外側で陽明門・殷富門・朱雀門・偉鑒門より内側の警備を担当すること職掌だったが、後には検非違使庁によって奪われ、有名無実化した）と合わせて五衛府を構成した。「の」以下の「□□」は、底本の注によれば、実際には文字が詰めてあるものの、欠字があったと推定される部分である。

・「此彼構へて」あれこれと気を配って。妻問婚であったこの当時、婿の衣食住の世話は

妻の家で調えるのが常識であった。
・「煩ひて、日來に成りにければ」病いに伏せるようになって、それが永がの患いとなってしまったので、の意。
・「便り無く成り」父母の死して経済的援助受ける背景を喪失してしまったことを指す。
・「繚ひ」「繚ひ」はまとう・まつわるの意で、「其」（対称の人称代名詞）、夫の身辺周囲、その日常の世話を指す。
・「何でか見苦くても御せむ」以下の夫の台詞の「何かで見棄てむずるぞ」、同じ妻の台詞「何かでか、此ては宮仕へはし給はむ」と同じく、反語。
・「吉からむ様」あなたが良いと思われるように。あなたがこうしたいと思う通りに。
・「只成りに成り持て行けば」ただもう矢継ぎ早に見苦しくなってゆくばかりなので。
・「外也とも」他所へお出でになったとしても。あなたが他の女性とお暮らしになられたとしても。
・「家も澄みて」がらんとして。
・「音信れ」手紙。
・「出でて其れも云はむや」底本の池上氏の脚注には、『（女の方から）表面に出て手紙が来ない不満など言うはずもなく。このあたり解釈に諸説がある』とし、小学館日本古典全集（馬淵和夫他訳注昭和五一（一九七六）年刊）「今昔物語集四」の頭注によれば、『この一句、意・接続ともに不明。あるいは、前後に脱文あるか』とする。
・「長宿直」当時は地方荘園の侍が、京の当該荘園の領主の邸宅に於いて長期間に渡って宿直（警固役。）の当番を勤めるために京に上った。
・「嚴し氣」「美し氣」。元来は、「威厳を持っている・堂々として立派である」の意であったが、「容姿・態度が優れている・美しい・心が穏やかで非の打ち所がない」の意となった。
・「將て下りて」「將る」（「将」の原義は「率いる」「従える」である）は「率る」とも書く。
・「切に切て」前は「頻りに」で副詞、「程度の甚だしいさま・ひどく」の意、後の「しきり」は動詞「頻る」で「度重なる・何度も続いて起こる」の意。
・「何かでか然る事はせむ」反語。どうしていままでの京での暮らし方を変えることなど出来ましょうや、いえ、出来ませぬ、という申し出への拒絶である。
・「弓など持て、其の夜、其の邊を行ければ」これはこの男が女を怖がらせて、次のステップへと向かうために行った戦略である（私は流れから見て、尼の提案によるものと考える）。足音や物音、それに感じた「狗」の「吠」え声と、ホラー効果を否応なく上げて、女を恐怖させるのである。弓は自身の護身・魔除け（鳴弦用）のためであろう。
・「喤り」原義は小児の泣き立てる声で、そこから、「怒る・喧しい」の意となった。
・「男、此の京の人の許には、寄も付ず成りにけり」以下、父郡司の家の婢となっていることから見て、男は京から、この女を連れて近江に戻ったが、自分は正妻の家に戻って、

連れて来た彼女は実父である郡司の館に住まわせておいたと推定出来る。
・「新しく、守。成りて下り給ふ」郡司の上司である国守（国司）の任期は四年（初期は六年）。
・「國、擧げて、騒ぎ合ひたる事、限り無し」小学館日本古典全集の頭注には、『新しい国守を迎えることはその地方の人々にとっては政治そのものが新しくなることであり、租税その他のことで期待と不安があった』とある。
・「守の殿（かう）」「かう」は「かみ」の転音で高官のこと。国守の敬称。
・「器量（いかめ）しく調へ立てて」盛大な饗応の準備をして。
・「京の」彼女の呼称。「京の者」の謂いであろう。
・「年來（としごろ）」郡司の息子に捨てられて相応の時間が経過していることを示す。
・「異下衆」彼女以外の他の下人。
・「小舎人童（ことねりわらは）」貴人の雑用係の少年。特に近衛の中将・少将（三衛（近衛府・中衛府・外衛府）における三将官制官職の第二位・第三位。平安初期の衛府制改革によって三衛が左右近衛府に整理統合されて以降は左右近衛中将を指す。ともに四等官制の次官に当たる）が召し使った少年を指す。彼女の元夫は、夫であった頃に兵衛の佐であったから、そこから着実に転任・累進したことが分かる。
・「然々の郡司の徒者也」底本の池上氏の脚注には『「従者」が正か』とある。
・「傅（かしづ）き立て」「傅」は音「フ」で、大切に種々の世話をすることを意味する。
・「早う」副詞で、「なんと、驚くべきことに」。ある事態に初めて気づいたことを示すが、後文に「然もえ心得ざりければ」とあることから分かるように、これに気づくのは本話柄の語り部である点に注意されたい。
・「睦ましかり」近親のように親しく心惹かれる、の意。
・「とよ」格助詞「と」＋間投助詞「よ」。文末に用いると詠嘆の意を添える。
・「京なむ有らめ」底本脚注に『「になむ」が正か』とある。
・「なむ許云ければ」底本脚注に『「なむど」または「など」が正か』とある。
・「仕へけるにこそと有らめ」底本脚注に『「と」は衍字か』とあり、小学館日本古典全集の頭注には、衍字かとした後、『あるいは、……というのだろうかぐらいの気持で用いられたものか』と附す。
・「娥（うるは）しく」「娥」（音「ガ」）は単漢字では、「美しい・器量が良い・見目良い」の意。小学館日本古典全集の頭注には、「今昔物語集」では特に麗しい『女の形容』や『香の匂い』『など、女性的な感じを受ける場合に用いられ』ているとある。
・「然（さ）るべきにや、哀れに糸惜しと思へば云ふぞ」底本脚注に、『しかるべきわけ（前世からの因縁など）があるのだろうか、しみじみいとしく思』えばこそ、かく言うのであるぞ、とある。
・「舊き男にて有りし人の故などにてもや、御ますらむと思ゆれば」小学館日本古典全集には、『前の夫であった人の縁故の方などでいらっしゃるかと思いましたので。昔の夫と

少しも気づかず、また知られないように意識している心情であろうが、数年前に別れた男女がお互いにわからなくなるという筋立てはいささか無理。』『いくら風体は変わっていても、昔の人と気づくのが自然であろう』と注するが、これは寧ろ「いささか」無粋な注と言いたくなる。

・「奇異(あさま)しくて」原義の「吃驚するほど意外だ」の意。後に意味として付帯してくるところの批判的ニュアンスはない、と私は読む。

・「然る氣無しに持て成して有る程に」小学館日本古典全集の頭注には、『元の妻が零落したことに対する心の驚きを無理に押えた態度をとっている時に』とある。

・「江」近江。

・「怖しや」小学館日本古典全集の頭注には、『京の相当の身分の妻のだった女にとって、ひなびた地方の海のような荒々しい音は恐ろしかったのである』とある。当時の近江の国府は滋賀県大津市大江神領にあったことが分かっている。ここは琵琶湖の南端瀬田川に掛かる現在の瀬田大橋右岸側から一・二キロメートルしか離れていない。郡司が近江国のどの郡であったかは分からないが、少なくとも琵琶湖の沿岸ではなかったことが知れる。

・「これぞこのつひにあふみをいとひつゝ世にはふれどもいけるかひなみ」「あふみ」は男女が逢瀬をするその二人の「逢ふ身」と「近江」の掛詞で、さらに生きる「甲斐」に琵琶湖の「貝」を掛ける。底本注で池上氏は『これこそ近江の湖の音だよ。これまで逢う身（近江）を避けて過ごしてきたが、あなたと一緒でなければ、生きている甲斐がない』と通釈されておられ、また小学館日本古典全集では、『男が女を前妻と知って、自分が真に愛情を抱いていたことを今確認したと告白し、逢う瀬を喜び、夫であることを名のる歌』と解説している。……しかしこの手放しの言祝ぎの歌こそが、ざわざわとひた寄せる妖しい水界と逢魔が時に感応して、悲しみと恥ずかしさの余り、魂(たま)も消え入らんとしている女のそれを増幅させ、遂にはその命をも奪ってしまうのである……

・「氷(ひ)え痊(すく)みければ」「痊」は音「シ」で、手足の引き攣ることを言う。小学館日本古典全集では『死後硬直』とするが、無粋である。これは重度の痙攣症状、ヒステリー弓を指していると私は読む。

・「男の心の無かりける也」小学館日本古典全集の頭注はここを批判して、『もともと歌を中心に作られた物語であろうから、これを「男の心なさ」で締めくくるのは酷で、編者の文学的感覚の乏しさを語ることになろうか』と評しておられるが、説話集としての型として教訓を附すのが定式化している「今昔物語集」にあって、かく指弾すること自体が寧ろ、私には「酷」と思われる。但し、確かに「男の心の無かりける也。其の事を顯はさずして、只、養育すべかりける事を、とぞ思ゆる」という二文は本話にあっては、聊か、瑕疵とは言える。

■やぶちゃん現代語訳

中務大輔の娘、近江の郡司の婢となったる話　第四

今となってはもう……昔のことじゃが……中務大輔であられた何の何某と申さるる御仁の御座った。男の子はのうて、娘子ただ独りだけがおられた。

その頃には既に家内不如意にて御座られたが、兵衛佐何の誰彼と申さるる御方を、その娘に娶わせて婿となし、年月を過ごしておられた。この間、貧しき中にも、これ、なんやかやと遣り繰りしては、婿殿のお世話をなさっておられたによって、かの婿も、その娘の許を去りがとぅ思うておるうち、中務大輔殿、これ、亡くなられてしもうた。されば、後見は御母堂一人ぎりとなって、娘は何かと心細く思うておるうち、その母君も、じきに病いにお臥しになられ、永く患いついて御座られたによって、娘はたいそう深ぅ悲しみ歎いておった。

ところが結局、その御母堂も亡くなってしもうたによって、娘独り、取り残され、泣き悲しんでおったものの、最早、かくなってはどうにもならなんだ。

すると、次第に家内に仕えておった者どももこれ、皆々、出て行ってしまい、すっかり人気ものぅなってしもうたによって、娘は夫の兵衛佐に、

「……親のあらしゃいましたうちは、なんとか致いては、あなたさまのお世話をし申し上げて参りましたものの、このように、たよれる生計の方も、おらずなりましたによって、最早、あなたさまのお身の回りのお世話をさえ叶わずなりましてございまする。……どうして……宮仕えにお見苦しいお姿であらっしゃるなんどということが許されましょう。……これよりは、ただ……あなたさまの――よきように――おとり計らいなさられて下されませ……」

と申したによって、男はこれを聴き、ひどぅ不憫に思うて、

「……どうして！　そなたを見棄てるようなことをするものか。」

なんどと答えては、なおも女の屋敷にともに住んではおったものの、じき、出仕の装束なんども見苦くなったかと感じたかと思うと、みるみるうちに、みすぼらしゅうなりゆくことの著ければ、妻は、

「……どこか外の方へ移られなさっても……妾をいとおしゅう思し召された折りなどには、またお訪ね下さいませ。……どうして……どうして、このようなお姿にて宮仕えなさるることのできましょうや。あまりに見苦しゅうございまする……」

と、しきりに勧めたによって、男は遂に屋敷を去って行った。……

されば こそ、女独りとなり、いよいよこの上もなきほどに、悲しく心細き思いをつのらせておった。家もがらんとして、人気も、これ、ない。……ただ独り残っておった幼き女童が、一人、御座ったものの……これもまた、着る物にも、もの食うことにも事欠くあり

さまとなったなれば……ふと気づいた時には、どこぞへ去(い)んで、姿の見えずなって御座った。……

　さてもかの夫はと申せば、これ、初めのうちこそ『如何にも不憫』と、思うて気にはかけておったものの、じき、他の女の婿になったによって、かの女へ手紙を送ることさえものうなって御座った。女の方も、手紙の来ずなったことへの不満なんどを表立って言い遣ることなど、これもまた、思いの外のことで御座ったれば、結局、出でて行ったきり、二度と、かの女の許を訪ぬることは、絶えてしもうた、と申す。されば、女は、これ、見るもおぞましく壊(こぼ)ったる寝殿の片隅に、ひっそりと独り、住まうておった。……

　さて、その寝殿のまた片端に、これ、何時の頃よりか、一人の年老いたる尼の住みつくようになって御座ったが、この尼、かの女の境涯を気の毒に思うて、時に、果物やら、食い物やらの、余れるもののあれば、それをもち来たっては、恵んでおった。されば、ひとえにその恩恵を唯一つの糧となして、女は年月(としつき)暮らしておったのであった。

　ところが、そのうち、この尼の許へ、近江国(おうみのくに)より、長宿直(ながとのい)と申す役に当たったとして、とある郡司(ぐんじ)の子なる、一人の若き男が上京して参り、宿をとった。

　さても、この若者、とある日のこと、その尼に向って、

「――体(からだ)を持て余しておる女童(めのわらわ)でも、一人、これ、世話して下さらぬかのぅ？」

と申した。尼は、

「……我れらは年老いて外歩きなんどもようせねば、何処に女童のおるかというようなことも知らぬ。……じゃが……そうじゃ！……このお屋敷にこそ、たいそう見目麗しくあらっしゃいます、姫君の、たった独り、いかにも現(うつつ)にあらんこともなきように……あらっしゃいますがのぅ……」

と応じたによって、男はそれを聴くや、

「――そ、その女、我らに会わせて下さっしゃれ！……さてもさても！……そのようにお心細くてお過しになさるるよりは――事実、ほんに、お美しいお方ならばこそ――一つ、国へ連れ下って、我らが妻にもしようとぞ思う!!」

と大乗り気に言うたれば、尼は、

「ならば、近々、その旨、伝えてみましょうぞ。」

と請けがった。

　この男、こう言い出してよりそのかた、尼に、

「……先の話は通して下さったか？……何？……まだ？……何故、まだお話下さらぬのじゃ？……早う早う！……」

と、頻りにせっついては責め立て参ったによって、尼は仕方なく、かの女の許に、いつものように果物などもて行きたるついでに、

「……このように……このままこうして……いつまでもお独りにて身過ぎなさっておらるるわけにも、これ、参りますまいに……」

などと水を向けた後(あと)、

「……さても……実は、ここに、近江より然るべき御身分の御方の御子の、上京しておられまするが、この度、このお屋敷の御主であらるる、あなたさまのことをお話申し上げましたところが、『そのように不如意のままに御座しまさるるよりも、自分の国へとともにお連れ申し上げたいものじゃ。』と、これがまあ、すこぶる熱心に申しておられますのじゃが……一つ、そのようにさせなさいまし。……このように……何もなさることものぅ、お淋しきままに、お暮らしなさいまするよりは……」
と慫慂したところが、女は、
「……ど、どうして……どうしてそのようなること、これ、出来ましょう。」
ときっぱり否んだによって、尼はその場は引き下がって帰った。……
この男は、尼より事の不首尾を聴くや、いやさかに女への思いを切に募らせ、その日の夜になるや、弓なんどを携え、その女の対の屋のほとりへと参った。されば、辺りにおった野良犬のこれを嗅ぎつけ、大きに吠えたてたによって、女は普段にもまして、もの怖しゅう感じ、もの凄き思いに怯えて御座った。夜の明けて後、かの尼、また何食わぬ顔をして、女の許へと訪れたところが、かの女の曰はく、
「……昨夜は、もう……まっこと……どうにも……もの怖ろしゅうて……なりませなんだ……」
と訴えた。されば、尼、すかさず、
「だから申し上げたので御座いまする！――かのように申す者に、うち具してお下りなさいませ――と。……かく身過ぎなされておられたのでは……これ、やりきれぬことばかりしか、起きは致しませぬのでは、御座いますまいか？……」
と、上手く、またしても水を向け得たによって、女も、
『まことに一体どうしたらよかろうか。』
と思うままに、如何にも逡巡する気色を見せて御座った。
さればこそ尼はこれを察し、その夜――こっそりと――かの男を、女の対の屋へと導き入れたので御座った。……
それより後、男はすっかり女に夢中になった。――田舎の侍なれば、こうした京のやんごとなき娘のそれは、初めての味わいにて御座ったによって、もう、一夜にして離れがたく思うて、長宿直の明くるや、早々に近江へと連れ下って御座った。
女も、
『かくなっては、最早、致し方のないこと。』
と思うて、ともに下ったのであった。
ところが、近江に着いて見れば、この男、前々より国元に既に妻を持って御座ったことの知れた。
女は取り敢えず、父郡司が家に住むこととなったものの、その本妻たる者、じきにこの女のあるを聴き知り、ひどく妬み、男を激しく罵ったによって、男は結局、この京から連れ帰った女の許へは、一向、寄りもつかずなってしもうたのじゃった。

されば、この京の人、親の郡司に使われて、身過ぎ致すことと相い成って御座った。
すると、そのうち、その国に新しき国守の決まって、お下りになられるということになったによって、これはもう、国を挙げての大騒ぎと相い成って御座った。
そうこうするうち、
「早や、守殿(こうのとの)が、国府へ、お着きになられた！」
という報知のあれば、女が仕えておった郡司の家内も大騒ぎとなって、果物やら食べ物などの饗応の品々を立派に調え揃え、国司の館(やかた)へと運ぶ込むことと相成った。――その頃、この京の人のことを父郡司の家では〈京の〉と名づけて、郡司のお気に入りとして、永年、婢(はしため)として使っておったのであったが――館へその物品々を運ぶに際し、多くの男女(なんにょ)が要ったがため、この〈京の〉にも、物を持せて館へと向かわせたのであった。
さても、守(かみ)は館にあって、多くの下々の者どもが、これ数多(あまた)の品々を持ち運び来たるを眺めて御座った。
すると、その中に、他の下人らとは異なり、これ、なんとも言えず、そそらるる面持ちをしたる〈京の〉が、守に目に留まった。
されば、守は御自身の小舎人童(こどねりわらわ)を召し出だして、こっそりと、
「あの女は如何なる者であるか？　それを訊ねて――今宵――我らが方へ連れて参れ。」
と命ぜられた。
小舎人童が仕切を致いておる下役人に訊ねたところが、しかじかの郡司の婢なることが知れた。されば小舎人童はその場に参上して立ち会って御座った郡司に、
「……かくの如く、守殿(こうのとの)の、女をご覧じなられて……かく仰せられておられまする。……」
と耳打ちした。
郡司は大きに驚きて、家にとって返すや、ともに連れ帰った〈京の〉に湯浴みをさせるやら、髪を洗わせるやら、大働(おおばたら)きの世話をなし、頭の天辺から足先に至るまで、これ、念入りに磨き立ててやった。その装いの成ったるを、郡司、いちいち点検した末、己れの妻に向って、
「これ見よ！　〈京の〉の着飾ったるこの見目の、なんとまあ！　麗しさを！」
と感嘆したと申す。
さても、その夜、衣(きぬ)などをも羽織らせ、守のおらるる国守の館へと、この〈京の〉をさし出したのであった。
――ところが！　さてもまあ、なんと！　この新任の近江守と申さるる御方はこれ、かの〈京の〉の本の夫、兵衛佐であられた御仁の、大成なされたお姿で御座ったんじゃ！――
――
……さても守は、この〈京の〉を近くへお召し寄せになられ、とくと見ようとしたところが、如何にも不思議なことに、いつかどこかで見たことがあるようにお感じなられたによって、この〈京の〉を抱(だ)いて添い臥したところ……なにか……まっこと……親し気で懐かしい感じが……身体(からだ)から伝わって来るのであった。されば、

「……お前は一体……如何なる素性の者じゃ？……何とも不思議なことに……いつかどこかで逢ったことのあるように、これ、思えてならぬのじゃが。……」
と、女の耳元に口を寄せて囁いたが、女はしかし――この男がまさかかつての夫兵衛佐であろうなどとは思いもよらざれば――、
「……妾（わらわ）は、この国の者にては、御座いませぬ……かつては……確かに、京におりました者にては御座いまする……」
と、言葉少なに答えるばかりであった。
守は、
『……京の者が田舎へと落ちて参り、郡司の館に使われておるに過ぎぬということなのだろう……』
と勝手に想像したりして御座ったが、この女の麗しさが如何にも希有のものに感ぜられたによって、それより、毎夜、召し出しては、夜伽させた。すると、なおも、身も心も摩訶不思議に異様な懐かしさの貫くを覚え、どうもやはり、一度逢ったことのある女のように思われてならなかった。
されば、守は女に向い、
「――さても、京にては如何なる身分の者で御座った？　さるべき前世より結ばれし因縁に依るものにてもあろうか、実はなんとも、しみじみと、いとおしく思わるればこそ、こうして問うておる。一つ、隠さずに言うてみよ。」
と質（ただ）したによって、女は、もはや隠すことの出来ずなって、
「……実は、まことは……しかじかの者にてございまする……もしや……あなたさまは……妾（わらわ）の古き殿方であられたお方の……その所縁（ゆかり）のお方などにても、あらっしゃるかとも存じましてございましたによって……このお召しを受けてよりこのかた、それを口に致すことを、これ、憚ってございましたが……そのように強いてお訊ねになられましたれば……お答え申し上げましてございまする……」
と、ありのままに語って、そのまま、泣き伏してしまった。守は、
『……さればこそ！　不思議に懐かしく思われておったも、道理！……こ、この女は、やはり！　わ、私の――昔の妻――であったのだ!?……』
と思うにつけても、何とも言えず、胸の詰まって、ともすると涙が零れ出でんとするを、女に気取られぬよう、さり気なく振る舞（も）うて御座った。
すると――
その時――琵琶湖の湖水の浪の音（おと）が聴こえてきたのだった。
女は、これを耳にすると、
「……こ、この……音は……何の音なのかしら？……ああっ！　怖しいこと！……」
と、しきりに怯えて御座ったによって、守はそこで、かく和歌を詠んだ。

これぞこのつひにあふみをいとひつつ

世にはふれどもいけるかひなみ

そうしてすぐに、
「――我れは――まっこと！　そなたの夫ではないか！」
と小さく叫んで、涙を流した。
　すると、女は、
『……ああっ！……さてはやはり……この人は私の元の夫、その人であったのだ！……』
と心づいたものか、そうして……その途端に、心の内に言いようのない哀しみと恥ずかしさが怒涛の如く襲い来たって……遂には……それに耐えられずなったものか……ふっと……ものも言わずなって……守が咄嗟に抱き寄せた、その身は……意識も、すでになく……手足も痙攣して硬直し……そのまま……ただただ、冷えに冷え入ってゆくばかりであった。
……
　守は、
「……こ、これは！　いったい！　どういうことかッツ?!……」
と喚き騒いでいるうち、女は儚(はかな)くなっていた。……

――――――

　筆者の思うに、この主人公の女、これ、まことに哀れな存在である。女は『……ああっ！……さてはやはり……この人は私の元の夫その人であったのだ！……』と心づくや、己(おのれ)が前世より業(ごう)として背負うてきた因縁の思いやられて、その哀しさと恥かしさに耐えきれずに、遂には死に至ったのである。守(かみ)なる男には、最も大切な、傷心の女への思いやりの心が、決定的に、欠けていたのである。その事実――自分が元の夫であるという事実――を明らかにせず、ただただ、この幸薄かった女を引きとり、よく世話をなしてやればよかったものを、と思うのである。
　なお、この事件については、女が死して後(のち)、この男がどうしたかについては、これ、よく分からぬと、かく、語り伝えているとかいうことである。

堀辰雄　曠野　やぶちゃんオリジナル原典訳注附　ＰＤＦ縦書版　完